様式８　別紙１

博士論文の内容の要旨

専攻名　国際学研究専攻
氏　名　AZALIA BINTI ZAHARUDDIN

This doctoral dissertation investigates the effects of own language use on ethnic Malay students who studied Japanese as a Second Language (JSL) at a Japanese language preparatory school in Kuala Lumpur, Malaysia. The effects of own language use in the classroom were explored using quasi-experimental methods consisting of two groups and two treatments. This study focused on investigating the effects of own language use on students' grammar comprehension with regard to its effects on the students' test scores and their overall understanding as well as their attitudes towards own language use. In addition to this, the grammatical words tested in the study were examined to determine which would be better understood using own language as compared to when using the target language only. The chapters of this dissertation are summarized below.

Chapter 1 covers the contextual background of the study which is set in Malaysia; a multiethnic, multilingual country. It discusses the statement of problems surrounding Japanese language education in the country as well as the aims and objectives of the research. The three research questions that guided this study are as follows:

1. Is students' grammar comprehension better facilitated by a teacher's use of own language or by providing target language-only information?
2. What are students' attitudes towards own language use?
3. Does exposure to own language use in the classroom improve students' attitudes towards it?

Chapter 2 is a literature review on the history and empirical research of own language use as well as the literature on students' attitudes. It also examines the theoretical framework used in this study which is the multicompetence theory and Macaro's theoretical positions of own language use.

Chapter 3 reports the findings of a pilot study that was conducted in order to fine-tune the research instruments utilized in the main study. Then, Chapter 4 describes in detail the methodology of the main study. Four instruments were utilized which are 1) a pre-test post-test achievement test, 2) diagnostic tests, 3) lesson questionnaires and 4) an attitude survey. The data collected were analyzed using Mann Whitney U tests, Wilcoxon signed-rank tests, frequency responses and thematic coding.

Chapters 5 and 6 report on the findings of the main study, which focuses on the effects of own language use on students' grammar achievement and students' attitudes. In addition, two exploratory questions investigated the difference in the perceived level of comprehension from the students and the difference in learning difficulty of each grammatical word. Initial results suggest own language use had positive effects on students when learning grammatical words associated with time-related expressions. Results from the attitude survey also illustrate positive changes in the attitudes of students who attended own language-inclusive classrooms compared to students who attended target language-only classrooms.

Finally, Chapter 7 discusses the findings of the previous two chapters in great depth, including its implications, limitations, and suggestions for future research. This dissertation is an effort to promote localization of Japanese language education in Malaysia so that it may empower local nonnative speakers in the country and further develop similar research in the field.

様式８　別紙２

論文審査結果の要旨

専攻名　国際学研究専攻
氏　名　AZALIA BINTI ZAHARUDDIN

１．審査概要

1）予備論文審査

学位請求のための予備論文 “The Effects of Own Language Use on Ethnic Malay Learners of the Japanese Language: Towards the Localization of Japanese Language Education in Malaysia”（「マレー系日本語学習者に対する媒介語使用の影響：マレーシア日本語教育の現地化に向けて」）は2020年9月23日に提出された。この論文に対して、9月30日の国際学研究科委員会で同研究科教員5名と外部委員1名の計6名からなる予備論文審査委員会の設置が認められ、10月17日に同委員会が開催された。

博士論文としての内容・構成・表現などについて各委員から意見を聞き、国際学研究科学位論文の審査等に関する申合せならびに評価基準（博士後期課程）に照らして博士論文としての水準を確認した上で、面接を実施して、教育的な観点から以下のような指摘を行った。本論文は、研究の目的や問題意識が明確で、外国語教育における媒介語使用の有効性を工夫した調査方法に基づいて実証的に論じ、章構成も整った論文として評価できる。しかし、用語や引用の適切さにやや欠けるところがある、表に関する本文中での言及や説明が十分ではないことがある、テスト項目の選択肢の数や学習事項の選択は適切か、５つの学習項目を選定した理由の説明が必要ではないか、媒介語使用への批判に対する反論として筆者の根拠も提示すべきではないか、統計分析として中央値の比較をしたほうがよい、語のつづりも正確にすべきであるなどの指摘があった。これらの指摘を受け、以下の改善事項を確認した。

〇文法テストにおいて５つの学習項目を選定した理由を十分に述べ、授業アンケートでは理解が困難と生徒が感じた語句についてその理由をもう少し深く分析する。
〇統計分析については中央値の比較を考慮する。
〇表や授業の状況についてもう少し丁寧に説明し、略語の意味も説明する。
〇引用文献一覧にはもれなく文献を記載する。日本語文献では氏名にアルファベットの表記を添え、著書・論文のタイトルにも英訳を付す。
〇明らかな誤記を正し、適切な表現を用い、適切な引用をする。用語の統一も図る。

なお、予備論文提出時の条件としてすでに確認済みであるが、日本学術会議の協力学術団体が発行する以下の学会誌に掲載されていることも確認した。

⑴ 学会名・学会誌名：全国語学教育学会日本語教育研究部会 (JALT) 『JALT 日本語教育論集』

論文タイトル：Reconsidering the direct teaching method in Japanese language education

詳細：15 号，pp.13-20, 2019 年 12 月掲載

(2) 学会名・学会誌名：日本比較文化学会　『比較文化研究』

論文タイトル：The role of own language in the localization of Japanese language education in Malaysia

詳細：141 号，pp.161-167, 2020 年 10 月掲載

以上を総合した結果、学位論文の審査請求に値するとの合意が得られた。

2）学位論文審査

学位請求論文は2020年12月15日に提出され、12月22日の研究科委員会で予備審査と同じ6名（外部委員1名）からなる学位審査委員会の設置が承認された。これを受けて学位審査委員会は2021年1月28日に開催され、第1回委員会、口述による最終試験、第2回委員会を実施した。

(1) 第1回学位審査委員会

予備論文審査において指摘された上述の改善事項について、いずれも十分な改善がされていることが確認できたため、全員一致で最終試験を行うことにした。

(2) 最終試験

最終試験は第1回学位審査委員会に続いて行われた。最初に筆者のAZALIA BINTI ZAHARUDDIN 氏に本論文の概要、独創的な点、予備審査での指摘事項がどのように改善されたかを中心に説明を求め、その後に質疑応答やコメントを行った。

その内容は、目次のレイアウトの乱れや第6章表26のTotal Sampleの数値が気になる、文法用語をgrammatical wordsに変更した理由は何か、臨地研究の授業の様子が追加説明されたり日本語文献の論文名や書名に英訳が付されたりして改善された、マレーシアでの媒介語（own language）使用の意義を述べて日本語教育の現地化を実証的に示したなどである。先行研究を非常によく調べているだけに本論文の独創性をもっとアピールすべきである、目標言語（target language）のみ使用するグループではテストの成績が低いのに自信があるのはなぜか、媒介語使用はどのような場合に効果的か、統計分析として中央値を比較したのは妥当である、時間関係表現に媒介語使用の有意差が見られたが、このことをもって媒介語使用が効果的と結論づけるのは慎重にすべきであるという発言もあった。目標言語使用こそが自発的言語学習を身につける方法であるという考え方にどう答えるか、今回テストしたもの以外の文法事項（例えば、関係節）もある、日本語における語彙指導や他国における日本語教育、さらに言語教育一般に今後の広がりが期待できるなどもあった。これらの質問やコメントに、AZALIA氏はそれぞれ大変丁寧に答えた。誤植やレイアウトの乱れなど軽微な修正を要する箇所が見られるが、大筋において問題がないことを確認した。

(3) 第2回学位審査委員会

論文審査および最終試験でのAZALIA氏との質疑応答の結果から、本論文について最終的に以下の評価がなされ、博士後期課程の学位論文の審査等に関する申合せと論文評価基準に照らして、学位論文［博士（国際学）］の要件を満たしているとの結論に達した。

・予備審査において改善が求められた事項のすべてに関して十分な改善がなされている。
・文法テストにおいて5つの学習項目を選定した理由を十分に述べており、最終試験でも確認することができた。ただし、授業アンケートで理解が困難と生徒が感じた語句についてはその理由をさらに深く分析することができなかった。
・統計分析については、調査対象の人数規模から見てより妥当なMann-Whitney U testとWilcoxon signed-ranks test を用いて中央値の比較をした。予備調査時と有意差は変わらなかったが、より信頼性の高い統計分析をすることができた。
・表の読み方や授業の状況についてもう少し丁寧に説明し、統計学の専門用語などの略語についても注釈をつけた。その結果、専門外の読み手にも分かりやすくなった。
・引用文献一覧にはもれなく文献を記載し、日本語文献では氏名をアルファベット表記とし、著書・論文のタイトルにも英訳を付した。
・明らかな誤記を正し、適切な表現を用い、適切な引用をした。用語の統一も図った。
・本論文の独創性は、マレー系日本語学習者に対する媒介語使用の影響について、先行研究を十分かつ詳細にふまえた上で、マレーシアでの日本語教育において媒介語（own language）を使用する意義を独自の現地調査に基づいて実証的に論じたところにある。現地調査では、媒介語（マレー語や英語）で指導を受ける学習者と目標言語（日本語）のみで指導を受ける学習者の2つのグループに分け、筆者がそれぞれのグループに対して授業を行った。文法テストでは文法項目の理解度を測定し、アンケート調査では媒介語使用への態度を分析した結果、媒介語使用の学習者に時間関係表現の理解度に有意差が、媒介語使用への前向きな態度が見られることを明らかにした点が高く評価できる。
・こうした筆者による研究には、マレーシアでの日本語教育の現地化という社会的意義がある。今回テストしなかった文法項目（例えば関係節）や語彙項目への適用、他国における日本語教育、さらには言語教育一般に広がる可能性があり、今後の研究の発展が期待できる。

２． 審査結果

以上により、本審査委員会は、AZALIA BINTI ZAHARUDDIN 氏の提出した学位論文が博士（国際学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。